往生傳の始源（一）

加藤智學

一

修道者の信行と其の往生の事蹟が記傳せらるゝといふことは、佛敎の實踐眞理を顯證する上に於て、頗る緊要な事であつたと考へらるゝ。佛敎の實踐眞理は、要するに四諦・八正道・等の法門に攝せらるべきものであり、正道の船に乘じて生死の難度海を度し涅槃（Nirvāṇa）の彼岸に到達するといふことが、其の要諦である。然るに多くの修道者は、其の涅槃に到らんとする道程に於て、一回、二回、又は多數の回數を累ねて、往生し來生して、其の道行を增進せなければならない。現世に於て一切の煩惱を斷盡し得たる阿羅漢（Arhan）は、更に後有を受けず。されば、無學位の阿羅漢果を得たる聖者だけには、命終つて更に往生するといふことは無い。命終れば無餘涅槃に入る。佛在世にありては、佛力の增上緣を被り、出家修道者の阿羅漢果を得たる者は、多數あつたやうであるが、阿羅漢果に達し得ずして命終つた人々も少くはなかつたと想はるゝ。在家の修道者は、現身に阿羅漢果を得ることはできない。そこで佛は、五下分結（身見・戒禁取見・疑・貪・瞋）を離れたほどの者に

は、阿那含(Anāgāmin 不還)といふ名稱を與へて、命終れば上界に往生し不退法を得て此の世に還らず般涅槃するものであると告げられた。かくて、佛在世には、出家の修行者のみならず、在家の篤信者にして、阿那含果を得た者が、かなり有つたやうである。さるほどに、幾多の篤信なる人々の中に、阿那含の名稱を與へることのできない人もあるので、佛は斯陀含(Sakṛdāgāmin 一來)・須陀洹(Srotāpanna 預流)の道位を立てられた。身見・戒禁取見・疑の三結を離れて貪・瞋・癡が薄くなつたほどの者は斯陀含果である。命終れば天界に往生し、それより人界に來生して、斯くの如く一たび往來して涅槃に證入する。また身見・戒禁取見・疑の三結を離斷したほどの者は須陀洹果である。必ず惡道に墮せず、定んで正覺に趣き、天上・人間に往生來生すること七回、それ已上に生を累ねること無く、極七有の天人往來の後に般涅槃する。佛は、かうした道位を立てゝ、其の出家在家の弟子を指導せられた。されば、原始時代に於ける佛徒は、菩薩は別として、一般に此の四果の道位を以て其の實踐過程を考察したのである。『雜阿含』四十一の第九經・『中阿含』三十六の『聞德經』等には、此の四果の意義が說示せられてゐる。此等の事義によりて思考するなれば、阿羅漢に達し得ざる有學三果の修道者は、涅槃に到らんとする道程に於て、必ず三惡趣に墮すること無く、退轉せず、勝處に往生し、或は天界人界に往生來生して、其の修行を增進するものである。

往生の語は、此處に命終りて彼處に往き生るゝことを意味する。卽ち轉生して他界に往くのが往

生であり、此の界に來り生るゝのが來生である。されば、天界へ生るゝのも、地獄へ往くのも、みな往生である。『雜阿含』三十二の第十二經には、「殺生する者、泥犂(Nirayа 地獄)に墮し、多く行ひしを以ての故に、彼に往生するならば」と、說かれてゐる。かやうに地獄へ墮つるのも往生と云はれて居るのであるから、往生といふ事は、天界や淨土へ生れて往くことばかりではない、何處へ轉生しても往生である。他界より此の方へ生れてくれば來生である。されば、往生は修道者の上のみにあることではなく、生死界に流轉して居る者は、みな幾度となく往生を累ねて五趣四生の果報を受けつゝあるものである。そこで、往生には、單に流轉せる者が善趣に生れ惡趣に生れるといふだけの事を意味する場合と、修道者が涅槃に趣向しつゝある道程に於て轉生して其の智德を增進する場合とがあるわけである。聲聞の佛弟子にありては、阿那含・斯陀含・須陀洹の人々は、此の後の意味の往生を經て涅槃に趣向せなければならぬ。大乘を修行する菩薩は、多劫を經歷して積功累德し、一佛國より一佛國に往生し、諸佛を供養し衆生を敎化して、大般涅槃の妙果に進趣する。要するに、無學果を除きて、有學位の修道者には、聲聞にも菩薩にも、其の實踐過程の上に必ず往生の有ることを、注意せなければならぬ。

『阿含』の中には處々に、佛が施論・戒論・生天論の說法を爲されしことを傳へてゐる。此は、施を行ひ戒を持して道德を修めた者は天界へ往生するといふ因果の事義を講說せられたものであるが、

これだけでは、まだ出世間の眞諦が開闡されてゐない。此の往生は、涅槃に進む道程に於ける往生ではない。佛は、かゝる說法の後に、對機を考察して、出要を告げ、苦集滅道の四聖諦を敎示して居らるゝ。四聖諦の說法は、苦を說き、苦の集を說き、苦の滅を說き、苦滅の道を說き、愛を滅盡し生死を解脫して涅槃を得證せんが爲に五根・五力・七覺支・八正道・等の道品を敎授する。かくて、此の正道を修行して愛盡無生の涅槃に到達せんとする道程に於て、有學位にして命終れば善處に往生する。修道者の往生は正に此の意味の往生である。古聖典が傳ふる佛徒の往生の事蹟は、正しく此の意味のものである。『增一阿含』三十一の第二經には、佛、諸の比丘に、無常想を敎へ、命終の後に三善處に生ずとして、天上と人中と涅槃の道とに生ずべしと、告げ給ひしことを、傳へてゐる。無常觀は苦諦の觀法である。「當に無常想を修し無常想を廣布すべし。便ち瞋恚惡惑の想なく、亦能く法を觀じ、亦其の義を觀せよ。若し命終の後には、三善處に生ぜん、天上・人中・涅槃之道に生ぜん」とあり。有學三果の行者は、惡趣に墮せず、必ず善處に往生する。天界・人界は、善趣であつて、其の中には佛法を聞信し修證することのできる善處がある。正道を修行すれば、三途八難を離れ、人天の善處に往生し、涅槃に趣向する。涅槃に趣く道は人界天界の中にあることではあるが、如上の經說は、何等かの意味ありて三善處(天上・人中・涅槃之道)を告げてゐる。大乘の聖典には、涅槃に趣く道としては、此の人界天界の善處のみならず、他方に有佛の淨土の有ることが宣顯せら

れてゐる。大乘教徒の誦傳する淨土は、そのかみ「善處」「勝處」「安樂處」等と呼稱せられし「涅槃之道」に攝して思考すべきであらう。『雜阿含』二十の第十四經には、六念法を說き、「六法にて苦處を出でゝ勝處に昇る」の語がある。『增一阿含』二十四の第三經には、「諸有の衆生、五事の因緣を以て如來を禮すれば、便ち善處天上に生ず」とあり。『中阿含』二十七の『阿奴波經』には、「必ず樂處に生じて長壽を得ん」とあり。かくて、此等の聖句と、大乘の古聖典『無量壽經』に「其の福德度世長壽泥洹の道を獲ん」「身獨り度脫して其の福德度世上天泥洹の道を獲ん」などと說かれたる言句とを對照して、此の間に事義の相通ずるものあるを注意せざるを得ない。淨土に往生することを度世上天泥洹之道と說けるが如きは、原始佛教の語調を傳ふるものである。原始時代にありては、阿羅漢に非ざる在家出家の篤信なる修道者、命終れば、苦處を出でゝ善處勝處に往生し、長壽を獲、泥洹（Nirvāṇa）の道を得て、定んで正覺に趣くと、說かれた。その或る者は人界に來生して泥洹（滅度）を得ると告げられてゐる。

如上の意義を以て往生得脫の信念思想の行はれつゝある時、往生者の信行と其の得道の事蹟が、如何に叙べ傳へられ記述せられたかといふことは、佛教の實踐眞理を研究する上に於て、頗る注意を要すべきことである。さりながら此の種の事項に關する研究は今日まで殆ど行はれて居ないやうに想はるゝ。その往生者の行蹟を記傳するといふ事は、支那・日本に於ては、多く行はれ、部分的

に記入せられたるもあり、多數の往生者の事蹟を集記したるもあり、それが一部の往生傳として撰作せられしもあり、一人の往生記や行業記の書かれたるもあり、實に多數の往生記傳が編作せられてゐることであるが、印度に於ては、さうした記述を見ること甚だ少く、往生傳として撰造せられたるが如きものは全く無いのである。『天竺往生驗記』といふものが行はれてゐるけれども、あれは日本に於て造られた僞作の書である。支那や日本に於て往生傳が製作せられて幾多の淨土往生者の行蹟が書かれてゐるのに印度に於ける淨土往生者の事蹟が何等傳へられてゐないでは物足らぬ感じがする所から、かうした往生記を僞作したものと考へらるゝ。印度に於て多數の淨土往生者が有つたには違ひない事ではあるが、記傳を遺すことの少い印度にありては、其等の人々の事蹟は消失して傳はらない。往生傳として支那日本に於て撰作せられたるものは、皆いづれも阿彌陀佛の淨土へ往生した人々の事蹟を書いたものである。西方往生の信念が廣く流布せられし後の時代の編作であるから、往生傳は悉く阿彌陀佛國への往生を記述してゐる。少々例外の記事を混入してゐるものが無いでもないけれども、それは云ふに足らない。支那日本の往生傳は、西方往生者を記傳してゐるものである。然るに其の信念の發生地である印度に於ては、阿彌陀佛の因源果海を說き西方極樂淨土へ往生することを勸むる幾多の聖典は誦傳せられたことではあるが、その往生者としての史的人物を叙傳することが少い。誰が往生したかと云はるゝと、答ふるに幾人の名を以てし得べきか。而

して其の往生の事蹟に就て明細に記述したものが全く無いのである。支那日本の往生傳には、臨終に音樂・光明・紫雲・異香・等の靈異を感じたなどゝ云ふ事が記叙せられてゐるが、さうした記述は、印度の史的文獻には、大聖の終焉を除きて、他には殆ど無いと云ふてよからうと思ふ。それならば印度に於て往生に關する記傳が無いかと云へば、無いことは無い。『阿含』その他の聖典の中には、佛弟子の往生の事蹟が處々に記傳せられてゐる。大乘經典には、東方の阿閦佛（Akṣobhya-buddha）の極樂（Abhirati）世界・西方の阿彌陀佛（Amitābha-buddha）の極樂（Sukhāvati）世界・等に往生することが說かれて、少數ながら、如何なる人が往生したかといふことも叙說せられてゐるが、『阿含』や『尼柯耶』の中には、さうした他方の佛國へ修道者が往生したといふ事蹟を記傳して居ない。然し「苦處を出でゝ勝處に昇る」とか「善處に生ずる」とか云ふ事が說かれてゐて、篤信なる修道者の涅槃に趣向する道程に於ける往生の事蹟は、處々に記傳せられてゐるのである。無學位の阿羅漢は、命終れば無餘涅槃に入り、後有を受けないが、其の餘の佛弟子は、出家も在家も、皆悉く命終れば何處かに往生して涅槃に趣向する。其の勝れたる事蹟が經典に委しく記傳せられてゐるのは、出家の佛弟子ならば、大概、阿羅漢果を得たる聖弟子であるから、其の終焉を叙するにしても、其の後世の往生が記述せらるゝ筈は無い。されば、往生の事蹟の記叙せられてゐるのは、多くは在家の篤信なる人々である。在家の信者は、阿羅漢には爲れないが、阿那含已下の道位を獲て、必ず正覺に趣く

べき身と爲りて、命終り善處勝處に往生したのである。そこで、古聖典には、此等の人々の聞法・修道・往生・等の事蹟が、種々に記傳せられてゐる。

二

かの舍衞(Śrāvastī)城の大檀越、祇園精舍を建立し孤獨の貧民に給施して阿那邠祁(Anāthapiṇḍada給孤獨)と呼ばれたる有名なる須達多(Sudatta)長者に關しては、種々の聖典に其の事蹟が記述せられ、其の篤信なる生活と其の病死して善處天上に往生したる事狀が、叙傳せられてゐる。『中阿含』三十の『優婆塞經』には、給孤獨長者と優婆塞(Upāsaka 淸信士)五百人とが舍梨子(Sāriputra)の說法と大聖世尊の說法を聽聞して歡喜したりしことが傳へられてゐて、此等の在家白衣の弟子の修道得果を知ることができる。佛が舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在ませし時、給孤獨居士と優婆塞衆五百人とが、舍梨子の所に往きて法を聽き、舍梨子が說法し已りて佛の所に往詣したので、給孤獨居士及び五百人の優婆塞も亦佛の所に往詣した。爾の時、世尊は舍梨子に對して、在家白衣の弟子の善く五法を護り四增上心を得たる者に得道の記別(豫言)を授けよと、敎へ告げられた。五法を護るとは、殺生を離斷し、不與取を離斷し、邪婬を離斷し、妄言を離斷し、飮酒を離斷し、其の心を淨除することである。四增上心を得るとは、佛を念じ、法を念じ、衆を念じ、戒を念じて、心靖く喜

びを得ることである。世尊は、此の五法と四增上心とを敎授して、「舍梨子、若し汝、白衣の聖弟子の善く此の五法を護行し此の四增上心を得て現法に樂居して易くして得難からざるを知らば、舍梨子、汝は、白衣の聖弟子に、地獄盡き畜生餓鬼及び諸の惡處また盡きて須陀洹(Srotāpanna 預流)を得て惡法に墮せず定んで正覺に趣き極めて七有を受けて天上人間に七たび往來し已りて苦邊(滅度)を得んと、記別せよ」と、告げられた。かくて世尊は偈頌を以て亦五戒と四增上心と布施と其の得果とを說かせられて、舍梨子及び諸の比丘・給孤獨居士・五百の優婆塞は、此の佛の所說を聞きて歡喜し奉行したと、傳へられてゐる。此の經の終に添說せられてゐる偈頌は、かなり長い頌である。此の偈頌の終には、善處に往生して最後に涅槃を得るといふことが歌はれてゐる。

若し光、照す所ありて、　慧ある佛弟子、
善逝に信向すれば、　根生じて善く堅住す。
彼は是れ善處に生じ、　意の如く人家に往きて、
最後に涅槃を得ん。　是くの如く各〻緣あり。

此の聖歌は、蓋し給孤獨長者等の篤信なる在家修道者の往生得脫を說示したものである。信慧ある佛徒、善逝(佛)を念じて、不退轉に住し、善處に往生し、後には意の如く人界に往生し、最後に涅槃を證得する。給孤獨長者の如きは、實に此の道程を經て修道得果すべき人であつた。

『雜阿含』四十七の第一經には、給孤獨長者が佛の所に詣でゝ其の所信を陳述した事が記叙せられてゐる。佛が舍衞國の祇樹給孤獨園に住し給ひし時、給孤獨長者が佛所に來詣して、「若し人ありて我が舍宅に在住するならば、みな淨信を得て、命終れば、みな天に生ずることを得るであらう」と言上した。佛は此の言說に隨喜して、「汝いま何によりて斯かる妙說を作すや」と尋ねられた。長者は答說して、「我が家に在る者は、みな淨信を得て、悉く天上に往生するであらう。懷姙する者あれば、我は卽ち彼に敎へて、其の子の爲に、佛に歸し法に歸し僧に歸せしめ、その子、生るれば、また三歸を敎へ、知見を生ずるほどになれば、また敎へて戒を持せしむ。奴婢を買ふにも、作人を傭ふにも、また先づ必ず三歸五戒を受けしめて、然る後に受け容れる。また我が舍宅にて佛及び比丘僧を供養する時、父母の名を稱へ、兄弟・妻子・宗親・知識・國王・大臣・等の名を稱へて呪願を爲す。名を稱へて呪願する因緣にて皆天に生ずることを得べしと、世尊より承はつたことがある。或は園田を施し、或は房舍・臥具・等を施したる、此の諸の布施の因緣により、みな天上に生ずるであらうと、思念してゐることである」と、白し上げた。佛は、「善い哉、善い哉、長者、汝は信心を以ての故に能く是の說を作す。如來は無上の知見ありて審に知る。汝の家に在る者、命終れば、皆悉く天に生ずるであらう」と告げられた。此の經說によれば、篤信なる給孤獨長者には、自信敎人信の美しき志行ありて、念佛念法念僧の妙好人であり、自他の修善生天を深信して、此の信念により、其

の家庭は正法受行の淸苑となり、家人は悉く淨化せられて皆天に生ずる光榮を得たのであつた。

さるほどに、給孤獨長者が重患に罹りし時、世尊は、彼の家に往き、其の病を問ひ、得道の記別を授けられた。舍利弗(Śāriputra)・阿難陀(Ānanda)・等も、彼の病牀を訪ひ、說法示敎して歡悅を與へた。此等の事は、『雜阿含』三十七の第八經・第九經・第十經・『增一阿含』四十九の第八經・等に記傳せられてゐる。『雜阿含』三十七の第八經によれば、佛が祇樹給孤獨園に住し給ひし時、給孤獨長者、重き疾に罹り、堪へ難き病痛に惱み苦んで居た。世尊は、長者の重患なるを聞きて、晨朝に舍衞城に入り、食を乞ひつゝ彼の家に至り、其の病を問はせられた。かくて世尊は長者の爲に「當に是くの如く學すべし、佛に於て不壞の淨信、法に於て不壞の淨信、僧に於て不壞の淨信を起し、聖戒成就せよ」と、四不壞淨の法を示敎せられた。長者は病苦の中より「世尊の說きたまひし如き四不壞淨、我に此の法あり、此の法の中に我あり」と、申し上げた。そこで佛は長者に告げて「善い哉、善い哉、長者は阿那含(Anāgāmin 不還)果を得べし」と、記別を授けられた。長者は世尊に種々淨美の飲食を供養した。佛は食し已りて種々に說法し示敎して長者の家を辭去せられた。此の經說の次の第九經には、阿難が長者の苦患を聞きて其の家に往き病床を見舞ふたことが、記敍せられてゐる。阿難は長者の病を問ひ「恐怖する勿れ。若し愚癡無聞の凡夫、佛を信せず、法を信せず、僧を信せず、聖戒具せざれば、恐怖あり、また命終及び後世の苦を畏る。汝は佛に於て淨信具足し、法

に於て僧に於て淨信具足し、聖戒成就す」と、四不壞淨を說き、長者の恐怖なき不壞淨の信念の告白を聞きて「善い哉、長者、汝は自ら是れ須陀洹果なることを記說せり」と稱讃し、供養を受けて說法示敎して去つた。前の第八經の記別には阿那含果を得るとあり、次の此の經には須陀洹果とあり、長者の得果は二樣に叙傳せられてゐる。いづれにしても、長者は、善處天上に往生して涅槃に趣向する篤信なる修道者である。かくて又次の第十經には、舍利弗が長者の重患を聞きて阿難と共に長者の家に往きて其の病床を見舞ふたことが、叙傳せられてゐる。舍利弗は長者の爲に深妙の法を說いて聞かせた。長者は落涙し、「我自ら顧念するに、佛に奉へてより二十餘年、未だ斯かる深妙の法を聞かず」と云つて、「哀愍して當に在家白衣の爲に深妙の法を說くべし」と、其の希願を陳宣した。「佛に奉へてより二十餘年」と云つてゐるから、長者は、二十餘年間、念佛・念法・念僧・念戒・念施・念天の生活をして、此の年、重患に罹り、癒えずして命終つたのである。

舍利弗が阿難と共に阿那邠祁(給孤獨)長者の病を見舞ふた事蹟は、亦『增一阿含』四十九の第八經に、かなり委しく記傳せられてゐる。舍利弗と阿難は、乞食して長者の家に至り、其の病を問訊し、舍利弗は、念佛・念法・念僧を勸說して、「若し善男子・善女人、佛法僧の三尊を念ずれば、三惡趣に墮すること無く、必ず善處・天上・人中に至らん」と告げ、緣起の法・空行第一の法を說き、長者をして聞法落涙せしめた。舍利弗は、廣く法を說きて、歡喜せしめ、無上の心を發さしめて、長者の家

を辭去した。舍利弗と阿難が去つて未だ久からず、須臾の間に、阿那邠祁長者は命終り、便ち三十三天（Trāyastrimśa-deva　忉利天）に往生した。その時、阿那邠祁天子に五事の功德ありて彼の諸天に勝る。五事の功德とは、天壽・天色・天樂・天威神・天光明である。阿那邠祁天子は便ち是の念を作した。「我いま此の天身を獲たるは、みな如來の恩に由る。今我は五欲に於て自ら娛樂すべからず。先づ世尊の所に至りて拜跪し問訊すべし」と。かくて、阿那邠祁天子は、諸天に圍繞せられて佛所に來詣し、諸の天華を持して如來の身上に散じた。時に如來は舍衞の祇樹給孤獨園に在ます。阿那邠祁天子は、虛空の中に在りて、叉手して世尊に向ひ、便ち斯の偈を說いた。

此は是れ祇洹の界、　　仙人衆は娛み戲ぶ、
法王の所治の處、　　當に歡悅の心を發すべし。

世尊は彼の天子に告げて、「汝は何の恩に由りて今此の天身を獲たる」と、問はせられた。天子は答へて、「世尊の力を蒙り今此の天身を受くることを得たのである」と、申し上げて、深く廣大なる佛恩に感謝した。かくて、阿那邠祁天子は、また天華を以て如來の身上に散じ、また阿難と舍利弗の身上に散じ、遍く祇洹を遶ること七匝して天へ還つた。斯くの如く此の經には給孤獨長者が忉利天（三十三天）に往生したといふ事を傳へて居る。又此の經には、忉利天の天子と爲つてから佛恩に報謝せんが爲に祇洹に來至して散華供養を行ふて天へ還つたといふ說話を載せて居る。而して此の說

話の中の天子の念言は、念佛の衆生を攝取し給ふ佛力他力の恩德を顯彰してゐるものである。げに此の經說の如きは往生記傳の始源の好史料として思考すべきものであらうと思ふ。

給孤獨長者の往生が斯くの如く記傳せられて、忉利天に往生したことになつてゐるが、忉利天は欲界の地居天であつて高い天界ではない。されは須陀洹果を得て往生したことになる。阿那含果の記別を授かつたといふ經說もあるが阿那含ならば色界の高い天へ往生したやうに記述せられねばならぬ筈である。「三十三天に生ず」と云ふてあるのは、長者が須陀洹を得て忉利天に往生したといふ事を傳へてゐるものである。それならば長者は後に何處に於て涅槃を得るであらうか。幾度か轉生して最後に苦際を盡し得るのは何れの世界であらうかと云ふに、それは此の人界であると云はれてゐる。彌勒佛（Maitreya-buddha）出世の時に此の界に來生して苦際を盡し滅度を得ると說かれてゐる。此の事を記說してゐるのは『增一阿含』四十九の第七經である。此の經には、佛の豫言として此の事が說かれてゐる。阿那邠祇長者が四兒を誘導して佛法僧に歸依せしめた時、佛は長者の將來の果報を記說せられた。將來の世に彌勒佛が世に出現し給ふ。爾の時、雞頭といふ國に蠰佉といふ王あり、蠰佉王の典藏人は善寶といふ人で、德高く智慧あり、天眼第一にして、皆能く寶藏の處所を知る。此の善寶といふ典藏者は今の阿那邠祇長者である。蠰佉王は、廣く福德を作し、八萬四千の大臣を將ゐて彌勒佛の所に往至して出家學道する。爾の時、善寶典藏も亦廣く福德を作し、亦出

家學道して苦際を盡すであらう。是れ長者が四子を將導して佛法僧に歸依せしめたる果報である。佛が斯かる事を記說し給ひしといふことを此の經は傳へてゐる。此の經說によれば、給孤獨長者は遠き將來の世に、此の人界に出生して、彌勒佛に値遇し、其の敎化の恩澤を豪り、出家學道して阿羅漢果を得て、苦際を盡し涅槃に證入する。されば彼の『中阿含』の『優婆塞經』の偈に、「彼は是れ善處に生じ、意の如く人家に往きて、最後に涅槃を得ん」と說かれたるが如く、長者は篤信なる白衣の聖弟子とてし須陀洹を得て善處に往生し惡法に墮せず涅槃に趣向したりし殊勝なる妙好人である。

三

摩竭陀(Magadha)國の大檀越、竹林精舍を獻じたる篤信なる優婆塞、頻婆娑羅(Bimbisāra 影勝)王の事蹟も、種々の聖典に記叙せられてゐる。王が聞法入信して優婆塞(Upāsaka 淸信士)と爲られた行蹟は、『中阿含』十一の『頻鞞娑邏王迎佛經』に叙傳せられてゐる。佛が王舍城(Rājagṛha)の摩竭陀邑に來り給ひしを聞きて、王は佛の所に往詣して懇に佛の敎說を聽聞した。佛は、施を說き、戒を說き、天に生ずる法を說き、それより更に生死の穢なるを告げて無欲を稱歎し、王に歡喜心・具足心・柔軟心・堪耐心・昇上心・一向心・無疑心・無蓋心ありて正法を受くる能力あるを知りて、彼の爲に苦・集・滅・道の四聖諦の法を說示せられた。佛はまた緣起の法を說き、無常・無我の眞理を告げ、

解脱の法を敎へられた。かくて王は法眼を生じ疑惑を斷じて果證に住し優婆塞と爲つた。それより王は三十七年間佛に接して法を聞き道を修めたのである。さるほどに王の晩年に至りて王舍城に一大事變が生起した。阿闍世(Ajātaśatru 未生怨)太子が提婆達多(Devadatta)の敎に順ひ父王頻婆羅(Bimbisāra)を幽閉して王位を簒奪したといふ大逆惡の悲劇が演ぜられたのである。此の事變は、『四分律』四・『五分律』三・『十誦律』三十六・『根本說一切有部毘奈耶破僧事』十七・等の種々の聖典に記述せられてゐる。頻婆娑羅王は、幽禁せられ、食を斷たれて、餓死せなければならぬことになつた。阿闍世の母韋提希(Vaidehi)は、密かに王に食を送つたが、阿闍世は其を聞きて、母をも禁じて父王の處へ往かしめぬやうにした。その後、阿闍世王の子が指瘡病を患ひしかば、阿闍世王は、その子を抱きて、その膿を吸ひ出した。韋提希は其を見て、嘆息して、「汝も幼き時に此の病患ありて、その時、父王は汝の瘡上を吸ひ膿血を飲み給ひし」と、昔の事を物語りしかば、阿闍世は父王に對して憐愛の心を起し、「若し老王なほ活きて在ますを知らせて呉れる者あらば國の半位を分つてもよい」と、諸の臣に告げた。諸臣は此の語を聞き、先を爭うて頻婆娑羅王の處へ走つた。老王は遠く多衆の走り來る音響を聞き、我に種々の苦刑を行ふものならんと思考し、長歎し迷悶して命終る。かくて、頻婆沙羅王は、四天王の北方天王宮に往生して毘沙門(Vaiśravaṇa 多聞)天王の子と爲つた。『根本說一切有部毘奈耶破僧事』十七には、如上の事蹟を詳說して、最後に王の往生の事を

記述し、「便ち命を捨てゝ北方天王宮に於て天の膝の上に在りて忽然として化生す。時に薜室羅末拏(Vaiśravaṇa)天は問ふて曰はく、汝は是れ誰なりや。曰はく、我は勝仙(Janavṛṣabha)と名く。何故に名けて勝仙と曰ふ。天の飲食ありて常に面前に在り、念に隨ふて食す、是の故に、長じたる號を名けて勝仙と曰ふ」と、一種の神話を語り傳へてゐる。天界では生れたる子に親が其の名を尋ね子が自分の名を答へて其の名義までも告げて居る。かうした神話めきた物語は、勿論、誦傳者によりて作されたる聖典文學である。四王天は欲界の天の中の最も低い天である。須彌山說で云ふと、須彌山の頂上に忉利天(三十三天)が在つて、須彌山の半腹の四面に四天王と眷屬とが在住する。東方には持國天、南方には增長天、西方には廣目天、北方には多聞天が住してゐる。此の四天王と其の眷屬とを四大王衆天とも四王天とも呼稱してゐるのである。頻婆沙羅王は其の北方多聞天の王宮に化生したと傳へられてゐるのである。『觀無量壽經』には、頻婆沙羅王は阿那含果を成じたと記してある。阿那含果を得た人であるならば、色界の高い天處へ往生すべき筈であつて、毘沙門天王の子に爲つて生れるといふやうな事は無からうと思ふが、『阿含』や律部の聖典では、頻婆娑羅王は須陀洹果を得たものとして、其の往生は、六欲天の中の最も低い處である四王天の中の北方天王宮へ化生したものと爲されてゐるのである。『阿含』では、『長阿含』五の『闍尼沙經』が此の事を傳へてゐる。佛が千二百五十人の比丘衆と俱に那提揵稚(Nāḍakantha)といふ處へ遊行せられた時に、阿難が靜室

に坐して思念した。「如來は人に記別を授けて饒益し給ふ所が多い。彼の伽伽羅（Kaṛkata）・迦陵伽（Kāliṅga）・等の十二人の大臣等は、命終つて、如來は、彼等は阿那含を得て居るから天上に於て滅度を取り此の世界に來らずと記說せられた。また餘の五十人は、命終つて、如來は、彼等は斯陀含を得て居るから天に往生して一たび此の人界に來生して苦際を盡すと記說せられた。また五百人は、命終つて、如來は、彼等は須陀洹を得て居るから惡趣に墮せず極めて七たび往返して必ず苦際を盡すと記說せられた。佛の弟子は處々で命終つてゐるが、佛は皆その往生を記說せられた。十六大國に於て命終つた者の往生得脫を、佛は悉く記說られた。然るに摩竭（Magadha）國の人の命終りし者の事をば佛は記說し給はず」と。そこで阿難は靜室を起ちて世尊の所に至り、其の思念したる所を陳べて、摩竭國の人の命終りし者の得果を記說し給はんことを請ふた。かくて「また摩竭國の毗沙（Bimbisāra）王は、優婆塞と爲り、篤く佛を信じ、多く供養を設け、然る後に命終る。此の王に由るが故に、多くの人、信解して、三寶を供養す。而るに今如來は授記を爲したまはず。唯願はくば、世尊、當に與に之を記すべし。衆生を饒益し、天人をして安きを得せしめたまへ」と、命終りし頻婆娑羅王の得果を記說せられんことを懇請した。阿難は、かやうに勸請して、佛を禮拜して去つた。それより世尊は那伽（Nāga）城に入り乞食して大林處に至り一樹下に坐し、摩竭國の人の命終りて生れたる處を思惟せられた。その時、佛を去ること遠からざる處に一鬼神あり、己の名を自稱して、

「我は闍尼沙（Janavṛṣabha 勝仙）である、我は是れ闍尼沙である」と、世尊に申し上げた。世尊は、「汝、何事に因りて自ら己の名を稱して闍尼沙と爲すや」と、問はせられた。そこで、闍尼沙は、「我もと人王と爲り、如來の法中に於て優婆塞と爲る、一心に念佛して命終りしが故に、生れて毗沙門天王の太子と爲ることを得、それよりこのかた常に諸法を照明して、須陀洹を得、惡道に墮せず、七生の中に於て常に闍尼沙（勝仙）と名のる」と申し上げた。かくて、世尊は、大林より那陀揵稚（Nāḍakantha）に至り、一比丘に命じて阿艱を喚び來らしめ、やがて阿難、佛の所に來りしかば、世尊は、さきほど闍尼沙と名のる一鬼神に接して問答し給ひし事情を阿難に語り告げられた。その闍尼沙より聞き取りし天界の物語の中に、大梵天王、童子を化作し、その梵童子が忉利天に來りて告げたる言說あり、其の中に、摩竭陀の優婆塞の得果を記說するあり、「我今更に說かん、汝等、善く聽け、如來の弟子、摩竭の優婆塞、命終りて、阿那含を得たるあり、斯陀含を得たるあり、須陀洹を得たる者あり、他化自在天に生じたる者あり、化自在・兜率天・焰天・忉利天・四天王に生じたる者あり、刹利・波羅門の居士大家に生じて五欲自然なる者あり」と。梵童子は此等の事を說示して、また偈を以て讃詠した。

摩竭の優婆塞の　　あらゆる命終りし者は、
八萬四千人あり、　　吾聞く、俱に道を得たりき。

須陀洹を成就して、　また惡趣に墮せず、
俱に平正の路に乘じ、　道を得て能く救濟せらる。
此等の群生の類は、　功德に扶持せられて、
智慧にて恩愛を捨て、　慚愧して欺妄を離る。

世尊は闍尼沙より聞き給ひし天界の物語を阿難に說き傳へられた。阿難は傳持して四衆に說示した。『闍尼沙經』は、かうした說話を傳ふる經典である。此の經には、此の闍尼沙が頻婆娑羅王の轉生したる天身であるといふことを明示してゐないけれど、かの『根本說一切有部毘奈耶破僧事』などの所說に對照して見れば、闍尼沙（勝仙）の前身は頻婆娑羅王である。されば、頻婆娑羅主は、一向心・無疑心にて佛に歸依し、正法を信受し、須陀洹を得、一心に念佛して、命終りて四王天の北方天王宮に往生し、毗沙門天王の太子と爲り自ら闍尼沙と名のり、佛所に往詣して天界の光景を物語り、梵童子の言說として摩竭陀の優婆塞の得道と往生を告げた。仙人殺害の業報を受けた頻婆娑羅王の最後は實に悲慘なものであつたが、一心念佛の功德により道果を得て善處天上に往生し、惡趣に墮せず定んで正覺に趣く身と爲つた。王が獲得したる道果は、『長阿含』の『闍尼沙經』には須陀洹となつてゐるが、『觀無量壽經』には阿那含となつてゐる。『觀無量壽經』では、佛が王宮に來臨して、眉間より光を放ち、十方諸佛の淨土を現じて韋提希に見せしむ。韋提は「我今極樂世界の阿彌陀佛の所に

生れんと樂ふ」と其の所求を別選し、「我に思惟を敎へたまへ、我に正受を敎へたまへ」と願求した。爾の時、世尊、卽便ち微笑したまふ。五色の光、佛の口より出でゝ、一一の光、頻婆娑羅王の頂を照す。王は幽閉に在りと雖も心眼障り無く、遙に世尊を見たてまつり頭面に禮を作す。自然に增進して阿那含を成ずと。かやうに叙傳せられてゐる。王が阿那含果を得たとすれば、色界の高き天處へ往生すべき筈で、欲界の天の中の最も低い四王天の北方天王宮などへ往生するといふわけはない。だから『長阿含』は、あの說話にふさはしく、道位を須陀洹として叙記して居る。須陀洹ならば欲界の天へ往生するが適當した報果である。王の道位に就ては『阿含』や律部の聖典と『觀無量壽經』との間に斯樣な相違があつて、どちらが眞實を傳へて居るのであるか分らない。部派の聖賢の誦傳と大乘の菩薩の誦傳との間に、いつしか斯うした相違が出來たものと見ゆる。然し道位に關する說の不同は、他にも例のある事で、かの給弧獨長者の事蹟の上にても、『雜阿含』の第八經には阿那含果を得ることに成つて居るし、その次の第九經には須陀洹果であるやうに說かれてゐる。されは頻婆娑羅王の道位に就ても二種の異說があつたのであらう。『觀無量壽經』は大乘の經典であるから、韋提希夫人が大乘の無生法忍を得たと說かれてゐるやうに、頻婆娑羅王も河等かの大乘の道位を獲得せられたやうに書かれても善かりさうなものだと思はるゝけれども、さすがに『觀經』誦傳の菩薩も、頻婆娑羅王の事蹟だけは大乘化せしめることはできなかつたと見ゆる。それは餘りにも多くの古聖

典に王の事蹟が傳へられて居るのであるから、王の修道得果を叙述するには、如何なる場合にも原始時代の傳説の儘を記傳せなければならぬ。韋提希夫人の事は、『阿含』や律部の聖典にも、阿闍世の母として其の名は出てゐるけれども、その修道得果に關する事は更に説き傳へられてゐない。その求道得益が説かれてゐるのは『觀無量壽經』だけである。だから韋提希の行蹟は如何樣にも大乘化して叙説することもできるわけである。かやうな事情から、大乘聖典である『觀無量壽經』に於て、頻婆娑羅王は阿那含果を成じ、韋提希夫人は無生法忍を得たと、説き傳へられた。其の往生の事は『觀經』には説かれてゐないが、王が阿那含果を得たとすれば、色界の五淨居天へ往生したと思想するのが普通であつて、大乘にては阿那含の人が阿彌陀佛の淨土へ往生するといふことも考へられるけれど、どうも頻婆娑羅王が西方淨土へ往生したとは、今までに誰もさう想ふた人は無いやうである。韋提希夫人に就ても、其の臨終や往生を叙傳した經説は無いのであるが、夫人の求道聞法を叙せる唯一の聖典である『觀無量壽經』に、往生極樂を樂ふ願心と見佛得忍とが傳説せられてゐるからには、夫人の西方往生を疑ふ者は居らない。されば西方往生者の第一人として思想せられ記傳せられたのは韋提希夫人であつた。（つゞく）